

俳句随想

〔二百七十四〕

汀子

前月号の随想で『虚子俳話』の「天地有情（一）」の文章を引用したが、その中の「畢竟人間の情を天地万物禽獣木石に移すのである。」という部分はもしかすると読者に誤解を与えるかも知れないと思う。虚子の真意は、万物がもともと情を持っているのであって、それが人間の情と応え合うということである。決して情を持たぬ天地万物に人間の情を投影するという意味ではないのである。『虚子俳話』の「天地有情（三）」に明確に次のように書かれている。

「天にも命がある。地にも命がある。／その間に一粒か二粒の時雨が生れて、天地の命が動いて、それがほろと落ちる。／俳諧の命。／天地有情。」

考えて見れば、天地万物が本来有情であるからこそ自然の一部である我我人間もまた有情なのである。

花鳥諷詠を突き詰めると天地有情ということに帰着する。これが虚子の晩年の考えであった。

ホトトギス千三百号に寄せて

稲畑汀子

ホトトギスは平成十七年四月号をもって創刊千三百号に達します。百八年四月月という長い歳月を俳壇と称する荒波を毅然と生き続け正しい俳句を次の世代に継承して行くために一生懸命努力してまいりました。

ホトトギスは「花鳥諷詠」という旗印の下に客観写生の技を磨き大勢の俳句作家を輩出して来たことを誇りに思っております。

この快筆をただ慶ぶばかりでなく、この日を迎えるに当ってホトトギスの歴史を謙虚に振り返り、今後の進むべき道を過ちなく次の世代に継承して行かなければなりません。

日本の文化は今大きな試練に立たされているのではないかと思います。そしてそれは何故であろうかと私はしきりに考えています。

情報化時代にはこれまで進めて来た方法では処しきれない何かがあります。しかし一方、時代の荒波に吞まれてしまつて本来の大事な基本を忘れてしまつたならば、俳句はお終いです。俳句という日本に生れた文学に何が一番大切かということは今もう一度私達は考え、思い出さなければならぬのではないでしょうか。

俳句は五七五という定型を原則として守り季題を詠むという最低の約束ごとがあるのです。それに加えて時代の変化に即して行かなければならない部分もあるでしょう。

私は次の世代の発展のため、ホトトギスの雑詠選者を稲畑廣太郎に託しました。

ホトトギスの雑詠選者が交代してもホトトギスの進むべき道は変わらないでしょう。

「俳句は花鳥諷詠詩である」「客観写生とはただ景色を写し取ることではない」「見るより観るへ」は客観写生の技を分り易く述べたもの。「古壺新酒」は花鳥諷詠という理念を貫くためにただ新しいがることを戒めたものです。それらは全てこの地球上の自然の営みを通して新しい発見を求めて行くための方方法でもあります。

自然と人間の関係を虚子は「天地有情」と言いました。私は「天地有情」という投句欄を作りその選者として投句をお待ちいたします。

これからの俳句への道をホトトギス誌友の皆様とともに新雑詠選者稲畑廣太郎を守り立てて頂きたいのです。新しい時代に向け一新したホトトギスに於て投句者と選者が一丸となつて「ホトトギス」の未来を作つて行くようではありませんか。

読者からのご意見は遠慮なくお寄せ下さるよう期待しています。

旬日記

汀子

平成十六年四月三日 菅屋ホトトギス会

皆花の心に 触れて集ひけり
これよりは朝な掃かねば花ミモザ
東京の昨日は 朧なりしかな

四月四日 関西野分会
一日晴 一日は 雨のさくらかな
地の果といふ 旅宿の海胆の旬

四月四日 下萌旬会
初花の 旬日といふ またく 間
咲き進み 咲き止まるも 初桜

四月五日 ロイヤル俳壇
止むといふ 雨まだ降つてゐるさくら
会済めば 忽ち長閑なりしかな

春宵の 刻々一人て 自由
水音の中に 山葵田ありにけり
春宵の 電話一本より 動く

四月七日 清交社
咲くものに 散るものに 風光りけり
旅衣迷ふも 花に浮かれつつ

四月八日 虚子忌
雨止みて これより 古都の花吹雪
雨霰受け 花冷の 走りけり

四月九日 工業倶楽部
黒にわが 忌心秘めし 花衣
春眠の 覚め坂を 登りてふり返る

四月十日 吉野山くつろぎ
花心間へば 散りくる 落花かな
風のなき 落花に 心ある 如く

花人をどつと 吐き出す 駅に待つ
皆花の如くは 花に集ひ 来し 吉野
峽深し 夕日は 花にだけ 届く

花の 闇見し 目を上げて 星も見る
花明り 夜空へ 伸びて ゆきにけり
宿の 灯を包み 込みたる 花朧

星朧 少し 離れて 星朧かな
庭の 灯には じまつて ゐる 朧かな
くつろぎ 第三旬会

朝空を 渡る 朝月なほ 朧
朝月の 光失せつつ 桜かな
朝寝など 勿体なき 旅吉野山

花冷の 吉野元温泉の 朝の湯に
投句して より 花冷の 温泉に 誘ふ
くつろぎ 第四旬会

散る花の 名残に 旅の 別れかな
山路より 覗いて ゆきぬ 花の宿
四月十三日 大阪倶楽部

初花といひ 旬日の 過ぎて ぬし
嘲を 旅の 別れと 聞く 朝
初桜とは もういへぬ 盛りかな

春風や 旅の つづき 如家 居
み吉野の 初桜には 間に 合はず
四月十三日 綿業倶楽部

春暁を 発ち 旅予定 狂ひなく
みよし野の 月春暁に 置き忘れ
家居して ぶくつる ぐ心さくらもち

四月十七日 ホトトギス社吟行会
武蔵野の 春を 惜みて 風渡る
四月十九日 「俳句王国」出句

蛙鳴く 夜道の 帰路となり けり
目つむれば 春眠にある 心地して
牡丹咲く 日まで 待てる 旅仕度

花衣脱げば 仕事の 待つてをり
四月二十日 有恒倶楽部
爪立てること 知つて ゐる 子猫かな

みよし野の 過ぎ易き 春行くばかり
遠くより 子猫 見守る 親らしく

旅長 閑仕事は 家に 置いて 来し
何もかも 今は 忘れて 旅長 閑
四月二十日 無名会

百千鳥 旅の 別れを 惜みけり
まだ 話足らざる 如く 夕桜
み吉野の 朝のは じまる 百千鳥

旅終へし 家居に 枝垂桜かな
満開の 桜 旅人 入られ 替る
まづ 耳が 覚めたる 宿の 百千鳥

待つ 桜 待たる 旅路 吉野山
四月二十一日 夏潮旬会
ふり返る 旅は 遙かよ 春惜む

柳絮 飛ぶ 日和 となつて 来りけり
刻々の 惜春の 情抱く 寡黙
春惜むときは 時間の 止りけり

野の色を 抜けて 柳絮の 旅となる
庭に 咲くもの 散るもの 春惜む
四月二十二日 井上蘇柳様

間に 合はぬ 花の 弔句 となり けり
四月二十三日 きさらぎ会
辛夷 咲く道に 出るより 迷はず

予定 組む 先の 先まで 朧かな
富士 朧なるも 所在の ありにけり
講演 演はる 九十分の 朧かな

四月二十三日 時雨旬会
麗かや 明日の ことは 考へず
旅共に せし 日々 春の 行かん 話す

散り 果ても 会へば 語りて 花の 旅
その ちのちも 会へば 語りて 花の 旅
四月二十四日 句会と講演の会

旅終へて 次の 旅恋ふ 桜かな
幾度も 通ひ 片年の 朝桜
又 次の 旅を 約せし 桜狩

四月二十五日 野分会
加はりし 笑顔に 春を 惜みけり
まだ 書けぬ 文章に 向き 春惜む

廣太郎句帳

廣太郎

平成十六年四月一日 蕉心会

下町の風に桜の遅速問ひ
フレッシュマンフレッシュウーマン亀鳴けり
一片の落花弾ける日差かな
高速艇音も霞んでをりにけり
子等寄せて蛸蚪の乱舞の始まれり
宇宙船めく水上バス川うらら
蛸蚪生れて三角池といふ有情
太典氏美女に囲まれ声うらら
四月三日 伝統俳句協会埼玉部会
片栗の花は山気に紛れざる
落椿 結界 越えて拾ふ君
寺繋ぐ花の遅速でありにけり
四月八日 虚子忌
花御堂溢るるほどの忌日寺
源氏山花の稜線ありにけり
四月九日 土筆会
山葵田を曲ればいよよ山深く
春の暮昨日鎌倉けふ芦屋
山葵田を抜け山葵田を抜け天城

春の暮聖金曜日てふ円居
柿本神社人丸忌の人出

四月十日 吉野くつるぎの旅

軽々と落花は天に消えゆけり
蝶といふ吉野に紛れ易きもの
蛇穴を出づれば吉野人溢れ
花見茶屋閑所となりて越えられず
癒えし人寿ぐ花でありにけり
折畳み椅子に沈めし花衣
幽霊も出るに知られぬ花明り
俳号の決まり復活祭の朝
地球 一自転 朝 桜夕 桜
花といふ一惑星の物語
花を去る句帳切符に持ち替へて
四月十五日 登高会
もう止めて君とスイートピーの香は
スイートピー飛び出しさうな昼下り
午後といふ蛇の飛翔でありにけり
花祭忌日の寺にありてこそ
スイートピー風に虚空を恋うてをり
四月十七日 ホトトギス社吟行会
風光る多摩の稜線歪めつつ
四月二十日 草木瓜会

春惜むにはこの日差この気温
乗り継ぎて稲城野に春惜みけり
ビルの影にも惜春のありにけり
今日少し道変へもして梨花に会ふ

四月二十二日 「万燈」三十五周年記念祝賀句会

再会の句碑惜春の鈍色に
風光るとき句碑の文字輝けり
竹落葉句碑に傾れてゆきにけり
鐘臚句碑に余韻を弾きては
一本の鉄路の旅や春日浴び
四月二十四日 ホトトギス社句会
亀鳴くや朝日俳壇K氏あり
夜桜の舞ひワキ出づるシテ出づる
四月二十七日 若水会
子供の日子供のやうな夫の居て
風の使者来て牡丹を持ち去りぬ
子供の日大人浮れてをりにけり
四月二十八日 目黒学園句会
百千鳥三楽章に和してをり
惜春や波止に汽笛を聞けばなほ
百千鳥この森守らねばならぬ
忌心を整へ来れば百千鳥

雑詠句評（三月号より）

葉　・青虎・中正
静　龍・千鶴子・憲明
保　佳・明倫・美奇
忠　彦・芳子・汀子

うになった。人知が競いあつて勝ち取るうとするその高所とは、まさしく〈神を恐れぬ高さ〉であり、無際限ではない筈である。作者は今、その〈神を恐れぬ高さ〉に立つて、いや恐る恐る立つて、広い下界を見渡しながら秋を惜しんでいるのであろう。〈神を恐れぬ高さ〉とは言い得て妙。（葉）

超高層ビルより眺めた絶景である。人間の能力は大したものだと感心する。というのも考えられない高い建築物を見るとよくもこんな高い建物が建てられたものだと思ふのと同時に、神に対して恐れを抱かないでよくもこんな高いものが建てられたものだと思う。その高さから遠くの景色まで見通せるのであるが、何となく見る情景と心の不安が交錯しているように思いつつ秋惜しむ心もわき上がって来る作者である。（汀子）（以下略）

秋惜む神を恐れぬ高さより　龍ヶ崎　今橋眞理子

神を恐れぬ高所より眺め見渡しながら、去り行く天地の秋を惜しむという実に壮大な情景を詠んだ句である。人知が開発し築いた現代文明は今日ではその極に達したかのごとく、空中飛行や超高層ビルと呼ばれる建造物など、天空の雲さえも容易に眼下に見下ろすことが出来るほどの高所まで、瞬時に人を運んでくれるよ

若水集

廣太郎選

水鳥・天皇誕生日

長短の在位天皇誕生日 香川湯川 雅
 水鳥や水の中にもある日向 同
 水鳥に湖散らかつてをりにけり 同
 千里来て水鳥の白汚れなし 神戸藤井啓子
 ひと雨に水鳥の白輝きぬ 同
 水鳥といふかしましきものの中 同
 水鳥の翔つや鳥語のある如く 岡崎小森葵城
 水鳥に風の音楽陣を組む 同
 水鳥に空は安全地帯かも 同
 水鳥の影累々と夕日差す 北九州本村照香
 風どつと来て水鳥を片寄する 同
 水鳥の啼くに静寂の星降り 同
 水鳥の何の苦もなく陸歩む 東京谷口和子
 水鳥のやうやく静か寝まるとき 同
 水鳥として赤き足杭一つ 同
 水鳥に悲しみ一つづつ分けて 弘前神照代
 水鳥の羽ばたく音も亦かなし 同
 水鳥の中の一つを子と見るも 同

水鳥の水尾二等辺二等辺 高槻会田仁子
 水鳥の陣に水面の傾きぬ 同
 水鳥を見てゐし人も帰りけり 同
 水鳥の羽音にあらず風あまた 札幌大地音生
 水鳥の姿いつしか見えぬ日々 同
 水鳥のいつも降り立つ川静か 同
 犬吠えて水鳥の陣崩れけり 愛媛宗末美嘉
 水鳥を狙ひし猫の野性なる 同
 羽艶やかに水鳥の日に遊ぶ 同
 水鳥の水撒き散らし立ち上がる 神奈川石田わたる
 水鳥の波に乗るとき一列に 同
 水鳥の覚えし波に乗る遊び 同
 水鳥に沼の隙間のなかりけり 前橋伊藤涼志
 水鳥の空を忘れてゐるやうな 同
 水鳥の織る漣の縞模様 同
 水鳥の動かす景でありにけり 広島松高孝子
 水鳥のあそびし窓や王妃の間 同
 水鳥に左右対称崩したる 同
 恩賜なるひと日天皇誕生日 神戸長山あや
 水鳥の飛び立ち闇のくつがへる 同
 水鳥の水てふ大地浅く浮き 同
 路地に子らあそぶ天皇誕生日 京都安原葉
 鳥塚の日向に憩ふ水鳥も 同
 水鳥の時のあたりはや暮るる 同

若水集句評 廣太郎

長短の在位天皇誕生日 香川 湯川 雅

平成九年一月号、この「若水集」第一回の巻頭は奇しくも今回最終回の巻頭と同じ湯川雅氏であった。季題「天皇誕生日」は、御存知の通り時代ともはどうしても変化するのであるが、それなりの難しさがあるだろう。今上天皇の場合は十二月二十三日であるが、この句では、季節感を超えた普遍的な天皇誕生日としてすつきりと表現した事により、一層天皇陛下が日本人の拠り所として天皇陛下の現在における身近さを感じられる。正に「雅に始まり雅に終った」若水集、というのは失礼だが、この作者、作品に心より感謝申し上げる。

水鳥の覚えし波に乗る遊び 神奈川 石田わたる

今回の兼題「水鳥」は、冬を日本の湖や川などで過ごす渡り鳥の事であるが、渡ってきてから日本の土地に馴れるまでの苦労は動物でもあるだろう。そして馴れたあかつきには余裕を持ってこんな「遊び」もするのではないだろうか。何か動物の愛らしさのようなものも感じられほっとする句である。

恩賜なるひと日天皇誕生日 神戸 長山あや

歴代の「天皇誕生日」は、全部ではないのであろうが、そのまま祝日として祝われる事が多い。記憶の新しいところでは昭和天皇の誕生日が「みどりの日」になった例にもあるように。作者はそれを「恩賜」と、誠に日本人の心ならではの表現で明るく詠んでいるのである。

水鳥に山ふところは池多く 松山 遠山安津子

やはり文字通り「水鳥」は水のあるところで冬の間生活をするものである。日本は、言われてみると結構池などの水のある場所が多いのではないだろうか。そんな風土を表現した事により、鳥たちのパラダイス的な日本の風景が垣間見られる。

出御待つ一時天皇誕生日 松本 唐澤春城

恐らく一般参観で、天皇陛下御一家が皇居バルコニーにお出ましになる間待っている多くの人々を写生しているのであろう。筆者はこんな皇居から近い場所で行事しているのに、未だ一度も一般参観に行つた事がなく、是非伺いたく思っているが、この句では、現在未だ陛下はお出ましではなく、バルコニーの下で待つ多くの国民の緊張感と、期待感が、喧騒を伴って目の前に迫ってくる。お出ましになられた瞬間の歓喜の声も聞こえてくるような句である。(以下略)